

PROGRAMME  
REPORT

# Thailand

文部科学省委託平成30年度初等中等教職員国際交流事業

## タイ政府日本教職員 招へいプログラム実施報告書

2018  
8.26-9.1



文部科学省委託 平成30年度初等中等教職員国際交流事業

# タイ政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書

バンコク・ナコンサワン・アユタヤ

2018年8月26日(日) — 9月1日(土)

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)



## はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO) は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4 千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人近くの教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

2015 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、国際連合大学の委託を受けて、文部科学省、タイ教育省の協力のもと、新たに「タイ教職員招へいプログラム」が始まり、毎年タイ教職員 15 名を本邦に招へいしています。今年度は、文部科学省委託事業「初等中等教職員国際交流事業」の一環として、8 月にタイ政府により初めて日本教職員計 5 名が招へいされ、文部科学省と ACCU から 2 名が随行し、本事業において日タイの相互交流が開始されました。

参加者はバンコクでタイ教育省にて表敬訪問をし、タイ国内の学校および教育文化施設等の訪問を通して、タイにおける教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、タイの教職員、児童生徒との交流を図ることができました。このたびの訪問が、タイの教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日タイの教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、タイ教育省、在タイ日本国大使館、文部科学省、及び、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2019 年 3 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)



# 目 次

1. プログラム概要 .....	5
2. 実施内容・訪問記録 .....	15
3. 成果と今後への活用 .....	31
付録 プログラム写真 .....	39
過去のプログラム実績 .....	44



# 1. プログラム概要



# プログラム概要

## 1. 実施の背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献するため、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進している。その活動の一つとして、2001年より、国際連合大学および文部科学省の協力のもと教職員の国際教育交流事業を行っており、これまでに韓国、中国、タイ、インドの教職員を3,800名以上招へいし、960名以上の日本教職員を韓国及び中国へ派遣してきた。

初等中等教育にかかる日タイ間の国際教育交流事業は2015年より始まり、タイ教職員の招へいプログラムとして2017年までにタイ教職員45名を招へいしてきた。これらの事業を受け、2017年に行われた日タイの教育大臣による会談でタイ政府による日本教職員の受入れが提案されたことを契機に、タイ教育省の協力により、第一回となる「タイ政府日本教職員招へいプログラム」の実施が決定した。

## 2. 目的

本プログラムは、日本教職員をタイへ派遣し、タイの教育や文化施設を訪問することを通して相手国について理解を深め、タイ教職員との学び合いを通じて教育や文化の多様性を理解し、日タイ両国の持続的な相互交流と友好を促進することを目的としている。

## 3. 目標

- (1) タイの初等中等教育における教育制度および教育課題への理解を深めること。
- (2) 日タイ教職員間のネットワークを構築し、帰国後に実践的な国際交流が育まれること。
- (3) プログラムの学びを通して帰国後、児童生徒および学校や地域社会に国際理解を推進すること。

## 4. 活動内容

- (1) タイの教育政策の現状と課題についての研修
- (2) タイの教職員および児童生徒との教育現場での交流・意見交換
- (3) 学校および教育・文化施設の視察

## 5. 日程

出発前オリエンテーション：2018年8月25日（土）

プログラム実施期間：2018年8月26日（日） - 9月1日（土）（7日間）

日付	日程	訪問先	活動
8月25日 （土）	前日 （午後）	成田空港近辺	出発前オリエンテーション
8月26日 （日）	派遣 第1日目	バンコク	東京（成田）出発 バンコク到着
8月27日 （月）	派遣 第2日目	バンコク  ナコンサワン アユタヤ	タイ教育省表敬訪問 学校訪問 教育・文化施設等見学

8月31日 (金)	派遣 第6日目	バンコク	
9月1日 (土)	派遣 第7日目		バンコク出発 東京(成田)到着

## 6. 参加者

下記の教職員、随員、計7名程度の参加とする。

- (1) 国際連合大学の主催により ACCU が実施した 2017-2018 年タイ教職員招へいプログラムの受入れ教育委員会が推薦する職員 1 名
- (2) 公募により選抜された、日タイ間の教職員交流に高い関心を持つ自治体または学校の教職員 4 名
- (3) 文部科学省、ACCU の職員各 1 名

## 7. 参加資格

- (1) 日本国籍を有すること。
- (2) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。
- (3) 将来にわたりタイとの教育交流の推進に寄与できること。特に、タイとの学校／教員／児童生徒／地域間の交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
- (4) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。
- (6) 訪問先が日本とは習慣の異なる国であることを理解し、突然の変更などにも柔軟に対応できること。
- (7) 日本国内にて、Eメール使用して円滑に連絡を取ることができること。  
※参加決定後は、参加者本人と直接連絡を取らせていただきます。
- (8) 日常会話レベルの英語能力を有すること。

## 8. 評価と報告

参加者は帰国後、所定の様式により ACCU に報告書を提出する。報告書は、ACCU 編集の実施報告書に掲載する。

- (1) 第1回参加者報告書提出期限：2018年9月18日(火)正午  
※主にプログラム中の成果について報告
- (1) 第2回参加者報告書提出期限：2019年2月1日(金)正午  
※主に帰国後の取組やその成果について報告

## 9. 渡航費等諸経費

- (1) タイ政府が下記について負担する。
- (2) 往復航空運賃（日本とタイの国際空港間のエコノミークラス航空券）
- (3) タイ国内の移動に要する交通費
- (4) タイ滞在中の宿泊、食事

ACCU が下記について負担する。

- (1) 日本国内交通費：自宅からオリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の羽田/成田空港からの自宅までの交通費の定額（ACCU の規定に準ずる）
- (2) オリエンテーション当日（8月25日）の宿泊

注1：オリエンテーション当日、開始時刻までに到着可能な交通手段がない場合に限り、前日（8月24日）の宿泊費を支給する。

注2：帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、帰国当日（9月1日）の宿泊費を支給する。

注3：本プログラムは公務扱いでの参加となるため、日当は各所属先にて負担する。期間を通して ACCU から日当は支給しない。

## **10. 通訳**

プログラム期間中は英語で運営される予定。

## プログラム日程

日程	時間	内容	宿泊
8/25(土)	13:30-13:50	オリエンテーション受付	ホテルマイステイズ プレミア成田
	14:00-17:40	オリエンテーション	
	18:00	ホテルチェックイン	
	19:00-21:00	懇親会	
8/26(日)	10:50	成田国際空港発 (TG641)	Nouvo City Hotel バンコク
	15:20	スワンナブーム空港到着	
	17:00	ホテル着、チェックイン	
	18:00	夕食 (ホテルにて)	
8/27(月)	09:30-10:00	タイ教育省表敬訪問	Nouvo City Hotel バンコク
	10:30-11:30	王宮視察	
	12:00	昼食	
	14:00-16:00	スワン・グループ学校訪問	
	18:00	夕食 (ホテルにて)	
8/28(火)	09:00	ホテル出発 (ナコンサワン県へ、所要 2.5 時間)	Mamaungpaa Hillside Resort ナコンサワン
	12:00	昼食 (タークリープラチャーサン学校の図書館にて)	
	13:30-16:00	- 歓迎セレモニー (カモン・ウォンスティ校長) - 学校紹介ビデオ鑑賞 - タークリープラチャーサン学校の代表団と交流 - コーヒーブレイク	
	16:00	ホテルへ移動 (ナコンサワン県)	
	17:00	ホテル到着	
	18:00	夕食 (ホテルにて)	
	06:30	朝食 (ホテルにて)	
8/29(水)	07:45-10:00	タークリープラチャーサン学校の代表団と交流 - 朝礼の見学 - 理科の授業見学 - 美術の授業見学 (伝統家屋) - コーヒーブレイク	Mamaungpaa Hillside Resort ナコンサワン
	10:30	文化交流 (日本教職員による日本文化授業)	
	12:00	昼食	
	13:00	文化見学 (タークリー群ノンポー寺視察)	
	14:00	タースーン寺視察 (ウタイターニー県)	
	17:30	夕食	

8/30(木)	06:30	朝食 (ホテルにて)	Krungsri River Hotel アユタヤ
	08:00	ホテル発 (アユタヤ県へ)	
	10:00-12:00	ジラサートウィッタヤー学校の代表団と交流	
	12:00-13:00	昼食	
	13:30-15:30	アユタヤ歴史公園視察	
	17:00	ホテル到着 (アユタヤ県)	
	18:00	夕食	
8/31(金)	07:30	ホテル出発 (バンコクへ)	Nouvo City Hotel バンコク
	10:00-11:30	サイアム博物館視察	
	12:00	昼食 (Nuvo City Hotelにて)	
	14:00-18:00	バンコク芸術文化センター視察	
	19:00	ホテル到着	
9/1(土)	07:35	スワンナプーム国際空港発 (TG676)	
	15:45	成田国際空港到着	

**【オリエンテーション講師】**

文部科学省 国立教育政策研究所 国際研究・協力部  
総括研究官 沼野 太郎

## 参加者リスト

No.	氏名	所属	職名	担当係
01	武田 國宏	上板町立高志小学校	校長	団長
02	青野 幸代	富山国際大学付属高等学校	教諭	情報共有係
03	大岡 成樹	大阪府立春日丘高等学校	首席教諭	写真係
04	川畑 隆平	金沢市立十一屋小学校	教諭	記念品係
05	千田 理愛	宮城県立支援学校女川高等学園	教諭	文化交流係
06	荒井 忠行	文部科学省大臣官房国際課	海外協力官	
07	河口 枝里子	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部	プログラム・ オフィサー	

## プログラム関係機関

### <日本側機関>

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan (MEXT)

在タイ日本国大使館/Embassy of Japan in Thailand

### <タイ側機関>

タイ教育省/Ministry of Education, Thailand

### <訪問校>

スワン・グラープ学校/Suankularb Wittayalai School (バンコク)

タークリー・プラチャーサン学校/Takhli Prachasan School (ナコンサワン)

ジラサート・ウィッタヤー学校/Jirasart Witthaya School (アユタヤ)

### <企画・実施・運営>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/  
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)



## 2. 実施内容・訪問記録



## 8月25日（土）午後 オリエンテーション（東京）



オリエンテーションの様子

プログラムの前日、ホテルマイステイズプレミア成田にてプログラムのオリエンテーションが実施された。

代表者の挨拶の後、文部科学省国立教育政策研究所 国際研究・協力部 総括研究官 沼野太郎氏よりタイの教育について講義が行われ、参加者がタイの教育概要と近年の教育改革等について学ぶ機会となった。

その後、ACCU 職員による日程の説明や参加者同士の自己紹介、タイの学校で披露する歌の練習などを通して参加者同士が互いに知り合い、翌日から始まるプログラムの準備を行った。

### プログラム参加者の興味・関心

- ・タイの学習指導要領の内容
- ・タイの学校のICTの普及率
- ・ICT教育やプログラミング教育
- ・タイの学校の生徒指導上の問題
- ・大学卒業後の就職率
- ・王室に対する教育
- ・教員の授業の担当役割について
- ・学校で仏教教育はあるか
- ・都市部と地方の教育格差
- ・外国語教育の現状、第2外国語教育はあるか
- ・特別支援教育
- ・進学率
- ・行事やクラブ活動について

### 講義「タイの教育事情について」Q&A（抜粋）

Q：教員の社会的地位はどうか？

A：先生は、タイ語で「アジャーン」と尊称されている。タイの教育は寺から始まっているので、敬虔な仏教徒の多いタイでは尊敬されている。

Q：タイの海外留学への関心はどうか？

A：都市部では、多くの子どもたちが海外留学に関心を持っている（留学が現実的である児童・生徒の数が増えている）。

## 8月26日（日）日本出国・バンコク到着

8月26日（日）に日本を出発した訪問団は、成田国際空港を出発し、同日午後にはスワンナプーム空港に到着した。その後、バンコク市内のホテルに到着し、タイ教育省より簡単なオリエンテーションを受け、ホテルのレストランにてタイ教育省職員とともにタイ料理を満喫した。

## 8月27日（月）午前 タイ教育省表敬訪問



タイ教育省へ表敬訪問

### 学校・機関の特色

タイ教育省への表敬訪問では、本プログラム担当の Suparanee Khamyuang 氏の他、職員数名が迎えてくれた。その後、タイ教育省副次官の Watanapon Ra-Ngubtook 氏から挨拶があった。訪問団を代表して、文部科学省大臣官房国際課海外協力官の荒井忠行氏が挨拶を行った。

両者からは、2015年から始まった日タイ間の国際教育交流事業では毎年15名のタイ教職員が日本政府より招へいされ、日本各地の教職員と交流を行い日タイ両国の相互理解と友好を深め教職員間のネットワークを構築することができ、さらに日本の教育体制、各学校の教育実践、教材・教具の活用等についても学ぶことができたという成果に言及された。

今回の「第1回タイ政府日本教職員招聘プログラム」の実施に際しては2017年5月に両国の教育大臣の協議により、日タイの教育交流の推進を一層深める必要があるということで合意され、2018年度本プログラムの実現にいたった経緯が話された。

続いて文部科学省の荒井氏から、「タイ教職員招聘プログラム」が日タイの教職員交流、日タイの相互理解・友好に大きな成果をあげていることが話され、タイ政府に深く感謝の意を伝えた。

その後、両者による記念品の贈呈がなされた。最後に和やかな雰囲気の中、参会者全員で記念撮影を行い訪問が終了した。

### 参加者の感想（抜粋）

- ・第1回の本プログラムが実現するまでの相互の文部科学省・教育省の協議、日タイの関係性の重要性を認識することができた。
- ・第1回訪問団に選出して頂いたことを名誉に思うと同時に、今回のプログラムの目的を参加者全員が明確にして、帰国後それぞれの学校で、それぞれの立場で教育実践を充実しなければならないと認識した。

## 8月27日（月） 午前 王宮視察



エメラルド寺院視察

### 概要・特色

タイ、バンコクの象徴であり、最も有名な観光地でもある王宮を観光した。ここにはタイの国王が暮らした王宮や歴代の国王の遺骨が納められる宮殿、迎賓館などがある他、タイで信仰されている独自の仏教において最も重要な仏像を本尊とした寺院(ワット・プラケオ)が建立されている。タイの国王を大切にする心や仏教に対する姿勢などタイの文化を知るには欠かせることのできない観光地である。

### 参加者の感想（抜粋）

- ・今回、訪問団で訪れた王宮はタイ、バンコクの歴史と文化を肌で感じるためには、ぜひとも訪れるべき観光地の一つである。日本に根付く仏教とはまったく異質なタイ独自の仏教とそれを信じるタイの国民の姿を知ることができる場所である。日本が島国という閉ざされた環境の中で独自の仏教文化を育んできたのに対して、タイは貿易の拠点としてたくさんの国に対して開かれた環境の中で独自の仏教文化を育んできたことを感じることができた。また、国民が熱心に仏教を信仰している様子を感じることができた。エメラルド仏の本堂にはタイ人専用の礼拝スペースと観光の順路が分けられており、礼拝スペースではたくさんのタイ人が丁寧な礼拝（ワーイ）を行っていた。近代の戦争による宗教的な断絶を受けずに、多くの国民の心には仏教と国王に対する深い敬意が備わっていることを知ることができた。
- ・宮殿や寺院の建築や装飾にはタイの柔軟な文化融合の力を見ることができる。古くに建造された寺院群は中世のヨーロッパの建築を思わせる様式にタイの仏教観をふんだんに盛り込んだような印象を受けた。近代の宮殿にも建築されたその当時の最新である西欧の建築様式が取り入れられ、そこにタイらしさを散りばめた上品で華やかな印象を受けた。タイは他国の文化を受け入れながらも、どこかでタイらしさを大切にしながら成長を続けている国であると感じた。

## 8月27日（月）午後 スワン・グループ学校訪問

### 訪問スケジュール

14:00～16:00 の間に学校概要の説明とタイ教職員との質疑応答が行われた。はじめに、副校長と同行した女性教員の2名から学校の概要（中学校・高等学校の男子校、教育理念、生徒数、学校設立の経緯、重点目標・教育内容等）を聞くことができた。以下は主な内容である。



タイ教職員との質疑応答

- ・数学と科学を重点教科として指導している。
- ・English Program は他の公立学校にない特色ある教育で、数学と科学は英語で授業を展開している。
- ・中学校ではグローバル人材育成のために、「Gifted and Talent program」を作成し教育活動を展開している。
- ・カリキュラムは各教科における知識・技能習得とグローバル人材として社会貢献できる人材育成のために、各種体験活動（日本でイメージすると特別活動）の実践にも重点を置いている。
- ・体験活動は40種類以上あり、ボランティア活動、部活動、体育的活動等がある。これらの活動は日本の生徒会のように、上級生が下級生に指導するという生徒による自治的活動で進められている。これらの活動で大切にしている点は、「自分で考える、問題があれば自分たちで話し合い解決すること」である。
- ・公立学校であるが卒業生はタイの各種分野（政治・科学・医学・芸術等）で非常に優秀な人材を輩出している。さらに、これらの卒業生が後輩のために寄付、受験指導（e-ラーニングの提供）、放課後の課外授業（日本で実践している補習のイメージ）講師として学校・後輩に関わるという伝統が継承されている。

最後に校内視察を行った。1階は学校の歴史博物館になっており、巡視の際には学生2名による英語でのプレゼンテーションが行われた。ICT ルーム等の特別教室、教科の授業風景も一部見る事ができた。

### 学校・機関の特色

タイで最も歴史のある公立中等学校で国王ラーマ5世により設立された学校であり、タイの各分野のリーダーを輩出している。スクールアイデンティティは「Academic Excellent and Leadership」でありグローバルリーダーの育成を担っている。

## Q&A（抜粋）

Q：入学者選抜はどのように行っているのか。

A：小学校4・5年生の段階でプレテストの実施。さらに中学校入学前に受験を行い倍率は4～5倍程度。

Q：優秀な教員をどのように確保しているのか。

A：採用試験は日本と同様にある。教員は大学院への進学、各種研修会において資質向上を図っている。

## 参加者の感想（抜粋）

- ・副校長の話からタイの各分野に優秀な人材を輩出している男子校であることが理解できた。先輩が後輩に学校文化を継承するという事に感心させられた。新興国が先進国の経済規模に近づくためのハイタレント人材の育成にエネルギーを注いでいる事に国の勢いを感じた。
- ・特に興味深かったのはスワン・グループ学校の教育に卒業生が深く関わっているということである。卒業生にとって母校の発展のために寄付をすることや母校に戻って後輩を指導することは伝統であり誇りであるように感じられた。それらはタイの文化として喜捨することが美徳であることも関係しているだろうが、教師たちが生徒たちに対して「先輩への感謝」「先生への敬意」「友への思いやり」という3つの思いを持てるように継続して指導し続けていることの効果が大きく影響していると感じた。

## 8月28日(火) 午後 タークリープラチャーサン学校訪問

### 訪問スケジュール

12:00-16:00 までの間でタイ教職員との昼食交流、図書館見学、そして意見交流会という流れで行った。図書館見学では、国王や王妃のスペースがあること、また生徒が作った絵本でコンテストを行っていることなどを観察した。グランプリの作品は5ヶ国語に翻訳して製本される。日本語に翻訳された絵本もあった。



意見交流会の様子

続いて、会議室へ移動し、校長の Kamol Wongsut 氏より挨拶と学校概要説明があった。以下は主な内容である。

#### ・語学教育

タイの生徒は卒業までに基本的に3ヶ国語(タイ語、英語の他に韓国語、中国語、日本語から選択一言語)を習得する。中国語を教える教師は多いため、生徒の募集枠が広く、中国語を選択する生徒は多い。最近は日本語を勉強したい生徒は増えているが、教師の確保が難しく、本校でもタイ人教師が日本語を教えている。

#### ・学校紹介

東京の私立学校、恵泉女学園と交流事業を行っている。本校の教職員を恵泉女学園に派遣したときには日本でのおもてなしを受けて、日本の教職員とも深い交流を行った。その後、恵泉女学園の生徒を夏休みのショートステイ事業で本校に招き本校児童と文化交流を行った。

### 学校・機関の特色

タークリープラチャーサン学校は日本でいう中高一貫の教育を行う地方の公立校でバンコクなどの都市の有名大学に進学を目指す生徒が多く在籍するナコンサワン県の進学校である。「Lead academic Thai Style World class standard.」を教育理念として国際レベルに通用するタイのアカデミックリーダーを養成することを目標としている。

### Q&A (抜粋)

Q: タイ文化の学習はどのように行っているのか。

A: すべての教科、学年で文化的な教育は行われており、特に社会科の学習で学ぶことが多い。留学生を招くときなどに特別に学ぶこともある。

Q：田植えの映像を学校紹介のプレゼンでみたが、もう少し具体的に教えてほしい。

A：部活動などで田植えの学習を行っている。最近の子どもたちは農業の難しさや苦勞を知らずに育っている生徒が多いので、それを学ぶために取り入れた学習である。地域の協力を得て、近所のお寺の土地を借りて活動を行った。

Q：環境保全の取り組みについて、詳しく教えてほしい。

A：県の環境保全活動中心学校に指定されていて、CO2削減や省エネルギー活動、クリーンスクールプロジェクトとして家庭での電気使用量をチェックする取り組みなどいろいろな活動を行っている。

Q：先生の服装について、ルールはあるのか。

A：曜日によって服装のきまりがある。

・月曜→公務員の制服、火・水曜→自由な服装、木曜→学校の制服

・金曜→トラディショナルな服装

また、タイでは月によって色が決まっており、例えば8月は母の日があり、母の日の色は青なのでシャツやネクタイを青色にするなど積極的に青色を着る先生が多い。

Q：タイの教師は授業以外の業務はあるか。

A：部活や特別活動の準備、事務や家庭訪問など日本の先生と同じような仕事内容を行っている。また、これも日本と同じく社会の急激な変化での仕事の負担はどんどん大きくなっている。特別な学校行事で土日に出勤することもあれば、Independent Study (IS)と呼ばれる土曜授業も行っている。

Q：地方と都会の学校で違いはあるのか。

A：教育課程は同じだが予算や教材の面で都市部は恵まれている。地方では予算が少ないため、予算が豊富な都市部の学校に転学する生徒もいる。また、都市部の方が進学や就職などでより多くのチャンスに恵まれている。地方の方が学費は安い。本校よりさらに地方の学校に行くと、生徒数も少なく教師も不足しているところもあり、本校から教師を派遣することがある。

## 参加者の感想（抜粋）

- ・印象として、日本とタイでは似た教育体制をとっているように感じた。都市への人材の流出、教職員の多忙化、教職員の不足などの教育現場が直面する問題はどちらの国でも同じ様子であり、環境保全プロジェクトや国際人を育てる教育など力を入れている教育分野も似ている。一方で、公立校でありながら仏教の科目があることや成績優秀者を積極的に公表し、エリートを養成に力を入れている様子などは日本にはあまりないものだった。
- ・図書館内には国王のコーナーがあり、伝統文化を大切にする姿が印象的であった。また、子どもたちが作成した絵本が展示してあり、表現力を高める工夫がなされていた。

## 8月29日（水）午前 タークリープラチャーサン学校

### 訪問スケジュール

この日は7:50から全校朝礼の見学をした後、科学とタイの伝統芸能の2つの授業を見学した。その後、訪問団からタイの生徒に向けて日本文化との授業が行われた。



朝礼で挨拶する訪問団

朝礼は毎日実施されており、全校生徒 2760 名と教職員が集合し行われている。朝礼の最初には、吹奏楽の伴奏に合わせて国歌、校歌、国王の歌を歌い、その後、お経を唱えていた。その後、先生からの話を聞き、朝礼が終わると生徒たちはそれぞれの授業に向かっていった。朝礼を通して、国歌などの歌を大きな声で歌う生徒が非常に多く、愛国心や国王の存在など日常の中から感じていることが分かった。さらに、仏教の教えが生徒それぞれに根付いていると感じた。



魔女に扮するタイ教職員

続いて、中学校 1 年生の科学（STEM）の授業を参観した。授業の概要は、氷と塩を入れた氷でどちらが冷たくなるか実験を行っていた。生徒の興味・関心を引き出すためにアイスクャンディーを教材として取り入れ、氷だけの温度と氷と塩を混ぜたものの温度を予想させた上で実験を行った。授業全体を通して生徒の興味・関心を持たせるために、先生がハリーポッターに扮し、魔法と科学の違いや流行りのダンスを取り入れ、授業の中に面白さの要素がたくさん取り込まれていた。実験では、生徒は役割分担がされており、自分のすべきことをお互いに確認しながらチームで実験を行っていた。

次に、美術とタイの伝統音楽、文化について見学した。美術では、タイの有名人や芸能人、母、動物のなど写真を見ながら、水性の色鉛筆や綿棒を使い、きれいに色のグラデーションを描いていた。伝統音楽では、男子生徒がタイの楽器演奏を行っていた。タイの木琴、笛、鐘、太鼓の演奏で、ゆっくりとしたリズムのタイの伝統の曲であった。文化については、バイトゥーイ（パンダンの葉）を使った花の飾りと蓮の花びらを織り込み、お寺などでお供えする際の飾り花造りやスイカにきれいな飾り切りをするフルーツカービングなどを見学した。タイの伝統文化を身に付けている生徒が多くおり、日ごろから自分の国の文化に触れ、学び、身に付けることが教育の中でできていた。

最後に訪問団からタイ生徒に文化交流授業を行った。日本語を勉強する高校生（50名程度）に対し、日本に関するクイズ、切り紙、ダンスを行った。生徒は日本に関する関心が高く、意欲的に授業に参加してくれていた。クイズでは日本のアニメや料理について話し、切り紙では、桜を作り大きな模造紙に貼って、きれいな桜の木を完成させた。初めて切り紙をする生徒が多かったようだが、器用な生徒が多く、手順がわかると自分たちが作りたいものをそれぞれ作ることができた。ダンスでは、タイで人気のAKB48とBNK48の「恋するフォーチュンクッキー」を生徒たちと一緒に踊った。ほとんどの生徒が知っており、人気の高さに驚いた。踊りが上手な生徒も多く、タイの生徒と楽しく交流を図ることができた。



さくらの切り紙を楽しむタイの生徒

### 参加者の感想（抜粋）

- ・朝礼はタイ人の愛国心を育てていると感じた。学校の朝礼開始時間の8:00には学校だけではなく、タイの公共の場、テレビ、ラジオにおいて国歌が流れている。その際、タイ人は立ち止まり、直立不動の姿勢をとることになっている。タイ全土でこのことが行われており、それが当たり前で定着しており、タイの文化のひとつになっていると感じた。また、国歌だけでなく、国王の歌など王室の存在も大きいと感じた。学校のいたるところに歴代の国王の写真や像などが飾られており、国王や王室の存在が大きいことがわかった。
- ・タイの中学校・高等学校でもSTEM教育に見られるように教科横断型の指導にシフトしており、これは社会の急激な変化に対応できる児童・生徒の育成のためには有効な教育であると考えます。さらに、グローバル化が急速に発展する世界において英語教育を一層重視している姿勢から日本の学校においても現在提唱されている英語教育改革を推進しなければならない。
- ・音楽・芸術の時間では、子どもたちがそれぞれの芸能を自分のものとし、自分で活動していたのを垣間見ることができた。
- ・タイの先生方はとても仲が良く、それが生徒に還元されているように感じた。みんなで生徒を育てるという姿勢が必要であり、生徒たちの自主性を重んじ、それを見守るといふことの大切さを再確認できた訪問であった。

## 8月29日（水）午後 タースーン寺視察

### 概要・特色

ワットタースーンはウタイターニー県にある有名なお寺である。広大敷地内には4つの大きな寺院がある。本堂はガラス精舎とも呼ばれ、クリスタルと鏡で飾られおり、とても煌びやかで豪華な装飾となっている。天井も鏡のため、外の光や照明の光を受け、本堂内はキラキラと輝き幻想的な空間となっている。本堂には金色の仏像や僧侶の像などがあり、タイの方々はそれぞれにお参りをしていた。また、お供え物を購入する場所や、僧侶にタンブンする場所もあった。本堂は開放時間が決まっており、9:00~11:30、14:00~16:00 までである。



光輝くタイのお寺

### 参加者の感想（抜粋）

- ・タイ人と仏教の関係を知る機会となった。タイ人のほとんどが仏教徒であり、とても信仰心が高いと感じた。今回訪れた、ワットタースーンはタイのお寺の中でも煌びやかで日本のお寺とは違い、どこを見てもキラキラしており、タイの文化を感じることができた。また、お参りの仕方についても日本と違い、頭と手を3回床につける作法を行った。お参りをしているタイの方の様子から長い時間仏像の前に座り、お経を唱えたりしている様子を見ると仏教が心のよりどころになっていることがよく分かった。タンブンは、魚が多く、迫りに驚いたが、タイの文化に直接触れ合うことができた。  
※タンブンは、タイ語で徳を積む行為のことを意味し、今回は魚に餌を与えることで徳を積んだ。

## 8月30日（木）午前 ジラサート・ウイッタヤー学校訪問

### 訪問スケジュール

10:00~12:00 の訪問の中で、学校概要説明、タイ教職員との意見交換及びタイの文化交流を行った。その後、昼食を取り、英語の授業を見学した。以下は意見交換の主な内容である。



校内を見学する訪問団

- ・ ESD 教育の取り組みについて  
2014 年から教育省の協力で ESD 活動に取り組む。
- ・ 外国籍の生徒について  
3~5%が中国、日本、韓国、ヨーロッパ出身。Intensive English Programme を英語で教えるため問題はない。
- ・ 文化遺産保全について  
文化遺産に対する知識を教え、幼・小・中・高で遺産保全活動を取り入れている。世界遺産のエリアの木の管理など。
- ・ 入学受験について  
受験は難しくないが、Science Math Programme は厳しい受験をする必要がある。
- ・ 特色カリキュラム  
基礎教育は教育省の方針に従ったもので、保護者の要望により外国語、数、理の重点プログラムができた。追加費用が必要。
- ・ Rice Project について  
ラーマ9世の方針に従ったもので、6年目のプロジェクトであり、アユタヤを良い環境にすることを目的としている。米だけでなく、果物も栽培し、作物を家に持って帰って料理したりと、応用できるようになった。スタッフ4名で全体把握し、生徒と保護者で管理する。
- ・ ICT について  
日本の交流校とのミーティングなどは ICT を活用している。



葉折り飾り体験

続いて、小学生・中学生によるウェルカムイベントが行われ、アユタヤ県の伝統文化である葉折り飾りの作り方やタイのお菓子作りを教わった。タイの伝統舞踊や音楽に包まれながら昼食を取り、午前の活動は終了した。

午後の学校内見学では、初めに小学校1年生の英語のクラスを見学した。授業では外国人教師がすべての教科を英語で授業することや少人数での授業を行うことなどの English Programme が実施された。児童が ESD をテーマに学んだ内容を他者に伝えるためのツールとして英語を用いていたことに感心させられた。

そのほか、国王提唱の「足るを知る経済」プロジェクトや環境省協賛の Green Project ESD Rice Project など様々な教育プロジェクトに参加している様子も見学でき、訪問は終了した。

## 学校・機関の特色

アユタヤ県に設立された私立校で、就学前教育・初等教育・中等教育の3つのレベルの教育を提供している。最も優れた私立学校の一つとして知られており、英語と中国語の外国語教育に力を入れている。ESD を教育課程に取り込み、「ESD Rice project」など様々な活動を通して持続可能な生活スタイルを促進し、生徒が持続可能な社会を創造できる世界市民になることを目標としている。

## 参加者の感想（抜粋）

- ・同校は、世界遺産が豊富なアユタヤ県にあり、歴史を重んじ、地域と連携し、子どもたちを育てていくという校風が至る所に感じられた。子どもたちと交流した際、物おじせずに流暢な英語で文化を紹介する姿に感銘し、頼もしく思った。
- ・アユタヤの環境保護から始まったライスプロジェクトは ESD の理念に合致した非常に興味深い取り組みである。主食である米をテーマに伝統文化・今日的な食文化を子どもが興味を持つアクティビティーを取り入れて学び、「足るを知る経済」を探求している。まさに持続可能な社会をつくる学びであると感じた。
- ・特に評価すべきは、保護者と地域住民の連携である。ESD カリキュラム開発、教育課題のモニタリング、ESD 導入のための委員会設置など、信頼関係があるからこそだと感じた。

## 8月31日（金）午前 サイアム博物館視察

### 概要・特色

Siam Museum（サイアム・ミュージアム）は、「タイとは何か？」を、宗教・食・歴史・文化・宗教・衣服・デザインなど、様々な視点から捉え、実際に資料に触れたり、体を使ったり、ゲームを行って、現在のタイを理解するための博物館となっている。各部屋に、テーマが設定されており、学びやすい作りになっている。

タイは、歴史上貿易の拠点ということもあり、西洋や中国のほか様々な国の文化を取り入れて発展してきた。そのため、自国の歴史やアイデンティティを学ぶためには、様々な視点から見るのが重要であり、資料に触れながら学ぶコンセプトとなっている。

4階から下に降りるという順路になっている。1番目の部屋は、タイの伝統衣装をきた人形が展示されており、「タイとは？」という問いに対し、様々なアプローチがあることを示唆する部屋となっている。

2番目の部屋に進むと、過去・そして近世・経済発展中・現在に至る、様々なタイにかかわるものが展示され、引き出しには関連するものや資料が入っているという仕組みになっている。子どもたちの様子を見ると、引き出しや扉には興味津々である。

3番目の部屋では、時代に沿った映像が紹介されていた。

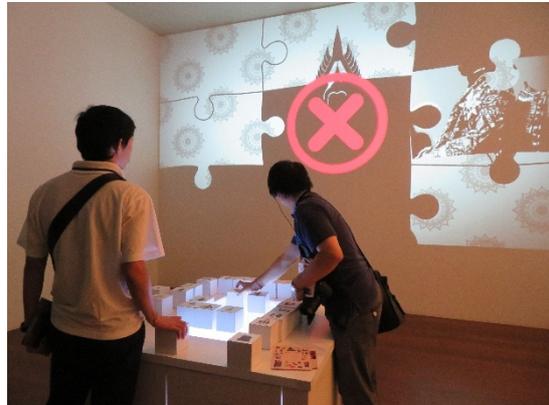
4番目の部屋では、タイの宗教・王室・文化などについて、テーマに関連するブロックをテーブルに並べ、うまくいくとチェックマーク、失敗すると×マークが表示され、すべてのブロックが揃うとそのテーマの映像が流れるという趣向になっており、他の大人の見学者や、私たちもついつい何度も遊んでしまった。

5番目の部屋は王室に関する部屋で、仏教思想と王室との関連について、玉座のレプリカが置かれ、寺院の世界観が絵で記されるなど世界観からとらえられるように展示されている。

6番目の部屋は衣装に関する部屋で、現在用いられている衣装について、王様の衣装、伝統的衣装、現在のタイの正装や、現在の普段着などの視点で並べられ、関連性がわかるようになっている。

7番目の部屋はタイで、ビニールに入った飲み物、バスのチケットと集金箱や、薬、生理用品などが並べられており、これらが実はタイ独特なものであることが気づくように展示されている。

8番目の部屋は食文化に関する部屋で、白いお皿（裏面に料理名が掲載）を、所定の場所に置くと、その皿の上に食材と調理法が映像でながされ、完成品が表示されるようになっている。特にルーツなどの説明が表示され、タイ料理と思っているものが、じつは別の国の料理であることがわかるような趣向になっていたりする。



実際に体験しながらタイを学ぶことができる

9 番目の部屋はデザイン等の変遷を示した部屋で、水兵から現在の女子学生のセーラー服に至る変遷や、仏像や仏塔のデザインの変遷などが、ぱらぱら漫画の要領で展示され、寺院デザインについては、透明のパネルに時代と地域の違いが記され、関連性と差異点がわかりやすく学べるようになっていた。

10 番目はタイ仏教について、タイ土着の文化やバラモン教などがミックスしたことがわかるように仏像の変遷も展示されていた。また、おみくじは私たちも実際に占えるようになっており、楽しい展示である。

11 番目の展示室では、タイの文化に関する BOX が並んでおり、中には関連するおもちゃや衣装、小道具など興味深いものが入っている。例えば、パレンタインが、タイでは”ValenThai”と呼ばれていることや、Box には学校で女の子が好きな男の子にハートのシールをシャツに貼るらしくそれが入れられていたり、チョコレートや、なんと避妊具まで入れられていたりした。

最後の部屋では、タイの衣装（伝統的なものや農作業用など）や小道具を身にまとい写真を撮ることができる。

### 参加者の感想（抜粋）

- ・タイの文化について、歴史的や文化的、王室、デザインなど様々な視点から考えられるように設計されており、各部屋では展示されているだけではなく、触れたり、動かしたりするという活動の中で、理解できるようになっていた。非常に楽しく学べ、全体で1時間半～2時間ほどかかるようになっている。日本の文化も、様々な国や地域のものが融合されたものであり、こういう展示方法は興味深いのではないだろうか。

### **3. 成果と今後への活用**



## A-01 武田國宏

(上板町立高志小学校校長)



(写真左)

### 「第1回プログラムの成功を願って」

2018年度第1回タイ政府日本教職員招聘プログラムが開催された。団長として参加させていただくことになり、まず考えた事は本プログラムの目的が達成され2019年度以後も継続してタイ政府が日本教職員を招聘する必要性を感じてもらえるようにすることであった。

タイの教職員との意見交換会においてはタイの現状を知ると同時に日本の教育活動の強みを伝えることにも配慮した。さらに、昼食・夕食の時間にはタイの先生方と通訳さんを介して、また、個人的に英語で可能な限り質問したり、日本の学校の様子を伝えたりした。

日本文化交流授業を実りあるものにするために訪問前に参加者全員でライングループを編成し参加者全員で意見を出し合い、千田先生が中心になり「日本文化クイズ・切り紙づくりによる共同作品作り・AKB48のダンス」という授業を計画し実践した。タイの生徒にとっては興味深いものになり日本への関心を高めることができたと確信する。

最後に私は、徳島のESDのシンボリック的な存在であるJAPAN BLUEの阿波藍、藍染めに訪問団のロゴを入れたタペストリーを団長として、Takhli Prachasan School校長に手渡すことができた。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて一層日本への興味関心を高めてもらい、両国がアジアで明確なプレゼンスを確保できるようにという思いを強くした。

みなさん、タイフードはタイの歴史そのもの！ コープクン クラップ

### 今後の活動予定

- 校長として「タイ文化」および「タイの学校におけるESD」を校内研修において紹介し教職員のタイに対する興味・関心を高める。  
校長として「全校朝会」においてタイで私が体験してきたことを子どもに紹介する。  
2学期の朝会は毎回テーマを決めてタイの話題を入れる。  
5・6年生の総合的な学習の時間に定期的に指導に入り、子どもが学習している様子をICTを活用しSuankularb Wittayalai Schoolと写真と英語のショートコメントで交流する。
- 上板町国際交流部会においてタイ紹介と英語教育の重要性と今後の方向性を確認し、次年度のタイ教職員受け入れに向けて準備する。  
徳島県教育委員会の指定研究校として実践研究している「エシカル消費」の学習の際にSuankularb Wittayalai Schoolのライスプロジェクトを紹介する。

## A-02 青木 幸代

(富士国際大学附属高等学校教諭)



(写真中央右)

### 「教育の原点」

本プログラムに参加し、教育の原点を再確認することができた。日頃、生徒に向き合っている時は、授業の準備、テスト作成、部活動、課外活動、進路指導に追われ、業務をこなすので精一杯で、生徒と心の交流をしているのだろうか、日々考えている。

タイ教育省の訪問では、どのような子どもたちを育てたいのかの方針を伺い、3つの学校を訪問した際、先生たちの熱意ばかりではなく、子どもたちのきらきらとした笑顔に触れることができた。目が合えば笑顔で“ワイ”をしてお辞儀をしてくれ、目上の人に対する敬意の姿勢が伺えた。さらに、授業では先生の発話に対して大きな声で反応し、受験のためではなく、実社会の中で自分をどう位置付け、貢献していくかを意識しているのと感じた。

自国の歴史、文化を重んじ、先輩が後輩に伝え、継承していく。先生は、それを見守り、生徒たちと密に交流し、ガイドしていく。生徒の学ぶ姿勢や生きる力が養われれば、いつの時代も遅く生きていくことができるのではないかと、考えさせられた。

### 今後の活動予定

- 教員研修会で成果報告する。

2学年のタイ参加者にと対して、タイ事情について、得た情報を伝える。

タイで得たことを、英語の授業で生徒に伝える。

- 地元の教育委員会に報告することを計画中。

## A-03 大岡 成樹

(大阪府立春日丘高等学校主席教諭)



(写真左)

### 「タイ国の教育現場を訪問して」

タイ政府からの招聘プログラムということもあり、タイでの教育制度を行政の資料と、各学校の資料を突き合わせながら理解することができ、有意義であった。日本・タイともどちらが良いというものではないが、タイでは全国的に中高の授業料・教科書が無償化されており、普通科高校しかほとんどないためカリキュラムも教科書も一種類しかないなど画一的である。しかし、その中での学校での取り組みや、授業の工夫を見ることができて、非常に参考になった。

今回は、2校目の学校の先生とそれぞれ2度の昼食と夕食を一緒に取ることができ、同じ教員として、日本とタイの環境の違いがあるにしても、保護者や卒業生との対応方法や、教員の異動や確保の課題などを話し合うことができて、連帯感が生まれた。特に、教育が政策上重視されているが、給与や待遇が十分ではなく、理数系や外国語の教員が不足している現実や、保護者のクレーム対応など共感できる場所が多々あり、そういった共感ができるからこそ、生徒と向かい合う上での教育課題等を考えることができた。

また、最後に訪問したサイアム・ミュージアムは、「現在のタイ」という国について、歴史、宗教、様々なデザイン、食事や服などの視点から、考える・見つめるということを主題においた博物館であった。日本もタイと同じように、様々な国や地域のものを取り入れながら発展しており、伝統的な文化（食・衣服・音楽・文学など）と現在のものとは大きく異なるが、そのルーツをたどると「自国」について考えることができるので、このようなスタイルの博物館があれば、楽しく学べるのにと感じた。

### 今後の活動予定

- 自分が担当している情報科の授業で紹介をしている。また、全校集会でも、自国・他国の文化について短時間で話をする予定。
- 大阪ESD事業報告書等に掲載する可能性がある。

## A-04 川畑 隆平

(金沢市立十一屋小学校教諭)



### 「ESD とは何かについてタイで考える」

首都この度、タイ政府日本教職員招へいプログラムに参加し、私の中で何が一番大きく変化したのかを思い返してみると、“ESD”というものにどのように関わっていけばいいのかを改めて考える機会になったことである。自分にとって ESD というものはあまりにも多岐にわたる分野であり、具体的にどのように推進していけばいいのか掴みどころがない存在であった。しかし、本プログラムでタイの3つの学校と訪問し、現地の教職員や生徒たち、また、共にタイでのプログラムに参加した校種や地域が異なる先生方、現地スタッフ、ACCUのスタッフと関わる中で、自分の中でのESDについての明確な視点を持つことができた。それは「人と人との関わり」という視点である。現地を訪問し、言葉の壁を超えたフェイストゥフェイスな関わりの中でしか経験できない感覚がある。私たち自身もそうだが、私たちが育てたい子供達の未来の姿もやはり、人と人との関わりの中で成長していくものでなければならない。教師として「人と人との関わり」をつないでいくことにESDの重要な役割と使命があるように感じた。

### 今後の活動予定

- 校内のOJTの一環として自分が講師となり「タイでの研修報告」の会が予定されている。また、子供達に向けても今後の授業や教育活動の中で本プログラムでの経験を写真や資料を活用して話すことができたらよいと考えている。
- 自分が参加している教材研究会で本プログラムでの経験や内容をまとめたものを報告する予定である。また、ESDや海外派遣プログラムについての研修や報告会があれば積極的に参加し、要請があればいつでも自分の経験を報告できるように準備をする。

## A-05 千田 理愛

(宮城県立支援学校女川高等学園教諭)



(写真右)

### 「タイにおける文化の学び」

今回、様々な学校を訪問する中で学んだことは、タイでは教育活動の中で文化を感じ、学び、自分のものとして習得する機会が多く組み込まれているということだ。学校教育の中で歴史、宗教、芸術などについて学ぶだけでなく、習慣として、朝礼で国家、校歌、国王の歌などを歌うなど一日の学校生活を見ても、自分の国を感じる機会が日本と比べて多いと感じた。そのため、幼い時から文化を感じ、学ぶことが当たり前の環境や考え方があると感じた。日本においても、今後、今まで以上に教育の中で日本の伝統や文化を身近に感じ、学べる機会が必要になってくる。今回のタイの研修を通して、その文化や伝統を学ぶ方法としてのヒントを得ることができた。学習の中で文化を学び、それを継続させていくための環境（地域、家庭）や価値観の必要性を強く感じる事ができた。

今回の研修を通して、タイと日本の教育の違いを知ることによって、教育の在り方について改めて考えることができた。

### 今後の活動予定

- 異文化紹介（道徳）：生徒を対象にタイの学校や文化、ことばについて紹介をする。  
研修：教員を対象に研修の報告会を実施する。テーマ（教育、文化、特別支援教育、料理など）を決め、教員に対してミニ講座を実施する。
- 地域へのタイ文化紹介：地域のJAで行われるタイ料理教室でタイ文化を紹介する。

## 事業担当者コメント

韓国政府および中国政府日本教職員招へいプログラムに続き、タイ教育省の招へいのもと、「第1回タイ政府日本居職員招へいプログラム」が無事実施できたことを、大変嬉しく思います。対となる「タイ教職員招へいプログラム」が開始されて4年が経ち、日本教職員の間にはタイという国への興味、タイの教育への好奇心が増していることを実感している最中での、本プログラムの実施の決定はとても喜ばしいことでした。

本プログラムでは、上述の「タイ教職員招へいプログラム」に参加された過去のタイ教職員の訪問校を訪問できたことが、一つの相互交流としての大きな成果であったと思います。過去4回実施されている同プログラムでは、多くのタイ教職員が日本教職員の受け入れを待ち望んでおり、現在受け入れは順番待ちとなっています。今後も日タイ教職員の持続的な交流のため、多くの日本教職員がタイへ訪れる機会があるよう願ってやみません。

近年、日本の学校における国際交流は欧米諸国にとどまらず、アジア諸国との交流が増えています。また、タイでも各学校において多くの生徒が日本語を第二外国語として授業を選択し、日本への関心はますます高まってきております。教職員の国際交流や異文化体験により、教職員自身の意識が変わること、そしてそれが子どもたちの変化へつながっていくよう、当センターもプログラムの発展に尽力して参りたいと思います。

最後になりますが、本プログラムの実施にご尽力いただきました、タイ教育省や訪問校をはじめとする関係機関の皆様に変更して感謝申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター  
国際教育交流部 河口 枝里子



# 付録





タイ教育省表敬訪問



事前オリエンテーションの様子（日本）



スワンナプーム空港到着



タイ教育省表敬訪問



タイ教育省職員らと夕食



王宮見学



チャオプラヤー川沿いで昼食



学校訪問①（スワン・グループ学校）



タイ教職員と意見交流



施設見学



授業見学



夕食交流会にてダンスを披露する訪問団



夕食交流会記念撮影



学校訪問②（タークリープラチャサン学校）



タイ教職員との交流



タイ教職員と記念撮影



タイ教職員と夕食



朝礼で紹介を受ける訪問団



STEM 教育見学



美術の授業見学



日本教職員による日本文化授業



東京オリンピックのエンブレムの紹介を行う派遣団



フォーチュンクッキーを踊る派遣団と生徒



生徒と記念撮影



タイ教職員と昼食



ノンポー寺院視察



タースーン寺院視察



先生方と夕食



タークリープラチャサン学校の教職員とお別れ



学校訪問③ (ジラサート・ウイッタヤー学校)



文化交流でダンスを披露する訪問団



授業見学



アユタヤ歴史公園視察



アユタヤ日本人村跡視察



サイアム博物館視察



ワット・ポー視察



バンコクでの最後の夕食

## これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2018年8月26日～9月1日	バンコク、ナコンサワン、 アユタヤ	5名 ※文部科学省、ACCU から 2名随行

計 5名

文部科学省委託 平成30年度初等中等教職員国際交流事業

タイ政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書

2019年3月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email [accu-exchange\\_ml@accu.or.jp](mailto:accu-exchange_ml@accu.or.jp)

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by Waco Inc. [120]

©2019 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)

Think Globally, Act Locally



ACCUC

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO  
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター